

ジェネレーション・レフト宣言

「資本主義 日本の落日」と題した諸富徹・京都大学教授の朝日 5 月 17 日朝刊掲載のインタビューを読んだ。さいごに「資本主義の中でシステムを改革する道を模索すべきです」と結んでいる。ふと『世界』2020 年 11 月号掲載の斎藤幸平さんの表題論文を思い起こした。関連ありそうなところを抜粋して紹介する。

ベビーブーム世代の高度経済成長や、グローバル資本主義の「時間稼ぎ」は、自然環境を犠牲にすることによって、成し遂げられてきた。「環境危機のトリレンマ」でいつも犠牲になってきたのは、「環境」だった。そのせいで、Z 世代が直面するのは、実体経済の停滞だけではない。山火事、熱波、干ばつ、洪水、スーパー台風…。これが、人類の経済活動が地球全体を覆ってしまった「人新世」の時代の「出来事」に他ならない。

ここでは、グレタ・トゥーンベリを中心に、コロナ後の世界に向けて、世界中の若者たちが共同執筆した、気候危機についての公開書簡から引用しよう。

私たちは存亡のかかった危機に直面している。この危機の解決策は、買ったり、建設したり、投資したりすることで手に入るものでない。気候変動対策の財源を確保するために、気候危機を必ずや促進してしまう経済システムを「回復」させようとするのは、端的に言って、馬鹿げている。私たちの現在のシステムは「壊れている」のではない。現在のシステムは、まさにそれがすべきこと、自らに課されたことを実行しているにすぎない。だから、もはや「修理」することなどできない。必要なのは、新しいシステムなのだ。

資本主義は正常に機能している。まさに、その結果として、環境破壊が進んでいるのである。だから、「新しいシステム」が必要だという。これほど明確な、ジェネレーション・レフトによる反資本主義宣言があるだろうか。求められているのは、資本主義の無制限の経済成長から決別し、ケア労働などのエッセンシャルワークを重視する脱成長型社会への大転換である。もちろん、そのような常識破りの対案を政治家だけで出せるわけがない。だから、議会外の力を使って、サンダースやコービンでさえも、踏み込めなかった領域へと跳躍しなければならない。

もちろん、若者だけに期待を託すのはでは不十分だ。さらに、日本には、ロスジェネ世代特有の問題もある。共闘のためには、世代間のギャップを克服していく必要があるだろう。そのためには、環境を犠牲にした経済成長、国債発行による財政赤字の増大といった世代間の対立を深めるような解決策ではなく、〈コモン〉の拡張や、ベーシック・サービス、生産手段の社会的所有のように、万人が恩恵を受ける普遍的ビジョンを追求しなくてはならない。

新しいビジョンを積極的に打ち出し、多様な社会運動を盛り上げることが、人新世の環境危機を「能動的出来事」に転換するための唯一の道なのである。

(2022 年 5 月 27 日)